

理学部ホームカミングデイ ～家族で体験 理学のワン derland～

広報室副室長 横山 広美
(科学コミュニケーション 准教授)

「さあ、正解は3つのうちどれでしょう、ゲー、チョコキ、パーをだしてください！」村山齊東京大学国際高等研究所 カブリ数物連携宇宙研究機構 機構長の掛け声で、小学生から70代の方まで、一斉に手が上がる。答えが示されると、あー、残念」「やったー」などの歓声があがった。

2012年9月20日(土)に開催された理学部ホームカミングデイは、相原博昭研究科長のアイデアで、今年から小学生高学年を対象にした家族向けイベントとして開催された。卒業生のお子さんお孫さんはもちろん、近隣の小学生にも積極的に声をかけ、家族で理学部に來ていただく企画で申し込みも伸び、当日はたいへんなにぎわいになった。「小柴ホールにこれほど若年層が入ったことはいま

までない」と研究科長、武田洋幸広報委員長ともに声をそろえた。

当日は、最初に物理学専攻浅井祥二准教授の30分の講演「宇宙たんじょうの謎をさぐる」があった。入念な準備がされた講演と実験で、ヒッグス粒子を例えるのにスライムの一部をちぎったり、質量を表現するのに小さな鉄球を転がして後ろから磁石で止めたり、小学生を飽きさせない見事な講演だった。

続いて行われた村山先生の宇宙に関するクイズ大会では、村山先生、浅井先生のサイン入り書籍などが景品となり、勝ち抜いた方々計15名にプレゼントとして渡され、大いに盛り上がった。

講演、クイズ大会と並んで大人気だったのが、ホワイエに設置された「化石や岩石を並べて見るコーナー」、「津波をつくっ

てみるコーナー」である。とくに津波のコーナーは子供たちを釘づけにし、常に満員だった。これらのコーナーを担当いただいたのは、地球惑星科学専攻の横山央明准教授である。

企画を広報室が行い、準備は総務の方々が中心になって行った。小学生を対象にしたイベントは理学部として初めてであったが、たいへん評判がよく、今後もうこうした取り組みを行っていきたい。



村山齊先生のクイズ大会で盛り上がる会場

「東大理学部で考える 女子中高生の未来」開催

濱垣 秀樹
(原子核科学研究センター 教授)

2012年9月30日(日)午後1時から、理学部1号館206号室において「東大理学部で考える女子中高生の未来」が開催され、女子中高生41名(中学生17名、高校生24名)、保護者23名(父親2名、母親21名)が参加した。

相原博昭研究科長の挨拶の後、塩見美喜子教授(生物化学専攻)が「小さなRNAによる遺伝子制御のしくみ」のタイトルで基調講演を行なった。引き続き、横山広美准教授(科学コミュニケーション)が「宇宙を知る素粒子、そして科学コミュニケーション」、鎌田直子助教(生物科学専攻)が「植物の“形”を

制御する遺伝子を見つける」、所裕子特任助教(化学専攻)が「光をあてることで性質が変わる材料」のタイトルで講演した。各講演はよく練られたもので、たいへん好評であった。質問も程よくあり、NHK取材(10月20日放送の「日本新声」に関連)のせいで質問がないのではという心配は杞憂であった。

休憩の後、横山准教授、鎌田助教、所特任助教を班長とする三つの班に分かれて研究室を見学した。各班には2、3名のTA(おもに大学院生、一部学部学生)が付き添い、研究の紹介、研究生活や進路などについての応答を的確にこなした。鎌田助教が講演で紹介した、突然変異研究の世界標準植物であるシロイヌナズナの

班には、相原研究科長も同行した。

会は、佐藤薫男女共同参画委員長の閉会の挨拶で終了したが、台風接近のため、パネルディスカッションがはしょられたのは残念であった。教職員スタッフやTAのみなさんのご協力に感謝したい。



シロイヌナズナ班の参加者たち

第27回技術シンポジウムを開催

実行委員長 綾部 充
(生命科学系 植物園日光分園 技術専門職員)

第27回理学系研究科・理学部技術部技術シンポジウムが2012年9月28日(金)に理学部1号館(技術発表・特別講演:西棟206号室,ポスター発表:中央棟338号室)において開催された。このシンポジウムは技術の向上およびさまざまな分野にわたる技術支援活動の公

開と進展を目的として、日頃の技術活動の成果報告と技術職員間の意見交換のできる貴重な場である。今回は通常の発表に加え、実物展示のあるポスター発表も行った。参加者は武田洋幸技術部長をはじめ、理学系研究科技術職員・教員・事務部職員・大学院生はもとより、他学部(10部局より24名)、他大学(6名)、一般企業(6名)からの参加もあり、73名を数え、盛会のうちに終了した。

シンポジウムは、武田技術部長の挨拶に続き、4題の口頭発表があり、活発な質疑応答がなされた。会場を移動

して、6題のポスター発表が行われ、ポスターや展示物を前に意見交換がなされた。休憩をはさみ、化学専攻の橘和夫教授による「有機化合物の化学構造決定とスペクトル化学」の特別講演が行われ、貴重な研究の話に興味深く聞き入った。

シンポジウム終了後、情報交換会が催され、橘教授、大西淳彦事務部長や他部局・他大学の方々と有意義な意見交換の場となった。

最後に、シンポジウム開催にあたり、多くの関係者の方々にご協力をいただいたことを、この場を借りて御礼申し上げる。



理学部1号館西棟206号室にて

第22回理学部公開講演会、開催される

実行委員長 藤森 淳
(物理学専攻 教授)

2012年10月4日(日)、本郷キャンパス安田講堂にて『三者三様 理学が挑む』と題して第22回理学部公開講演会を開催した。当日は朝から晴天で絶好の行楽日和にもかかわらず、700名近い参加者があった。生物学から竹内秀明助教(生物学専攻)、物理学から浅井祥仁准教授(物理学専攻)、地球科学から木村学教授(地球惑星科学専攻)が、理学部における最新の研究成果をわかりやすく解説した。

相原博昭研究科長の挨拶に続き、竹内助教が「メダカから探る恋心の神経機構」と題して、「恋心」を司る神経細胞の同定に成功した研究成果について講演した。メダカの行動の観察・実験から始まって、謎が順を追って解き明かされる様子を優しい語り口で紹介した。浅

井准教授は「ヒッグス粒子に迫る」と題する講演で、昨年から今年にかけて世界中で話題となったヒッグス粒子の発見に関して、宇宙と物質の成り立ちから説き起こして、時に笑いを巻き起こしながらヒッグス粒子の役割の重要性を解説した。木村教授は「海溝型巨大地震の新しい描像」と題する講演で、東日本大震災後に急に浮上した南海トラフ大地震の可能性に関して、その予測に至った最近の地震学の新しい展開について熱い語り口で紹介した。

介した。

講演後の歓談会でも活発な議論が続く、閉場時間を過ぎても多くの参加者が講演者を囲み、熱心に質問を続けていた。今回は、理学部のカバーする広い学問分野を反映して講演内容が三者三様であったとともに、講演者の先生方が3世代を代表していたという意味でも三者三様で、とても楽しい講演会であった。次回は会場を駒場キャンパスに移し、2013年4月21日(日)に開催予定である。



安田講堂で熱心に聞き入る参加者。講演後の歓談会でも活発な議論が続いた。